

研究室のホープ vol.47



田中 彦孝 さん

岐阜薬科大学
生体機能解析学大講座
薬効解析学研究室
大学院博士課程2年

原因の見えない神経疾患。ブラックボックスの中身に 限りなく近い場所で勝負したい！

田中さんの研究テーマは、筋萎縮性側索硬化症(ALS)。宇宙物理学者・ホーキング博士の罹患で知られる神経疾患だ。脊髄の運動神経細胞が破壊され、手足が動かなくなり、嚥下や呼吸すら難しくなる。「非情な病気です」と田中さん。すでに研究し尽くされた感があるにもかかわらず、ALSの原因はいまだに不明だ。田中さんは解析技術の進歩を背景に、これまでは見えなかったタンパク質や遺伝子の働きに注目し、ALSの原因究明や創薬を目指す。今年の国際学会では、バイオマーカーに関するポスター発表を行った。「手がかりが見つければ、それだけで患者さんの役に立つから。狭く深くでなくていい。ゼロを1にしたい。派生する現象を追うのではなく、ブラックボックスのすぐそばで勝負したいんです」。

田中さんは愛知県半田市出身。自然の豊かな土地柄で、子供

の頃は「へびを捕まえたり、悪さばかりしてた」と笑う。研究への漠然とした興味から同大へ進むが、原教授との出会いが一つの転機となった。「それまでは、敷かれたレールの上を走っていたので(笑)。『自分で考える』とよく叱られました。実験の組み立て方や、データを読み込む方法が少し身につけてきた今は、叱られた意味がよくわかります。「研究のための研究ではなく、患者さんのQOL向上に役立つ研究を」という教授の姿勢には強く共感する。「人の痛みがわかる人間になりたい。原先生みたいに、物事が幅広く見える研究者になりたいですね。息抜きは車の運転。ときには金華山や飛騨高山まで愛車インテグラを走らせることも。運転中は全てを忘れられるという。「ゼロから1」を目指し、田中さんの挑戦は続く。

薬効解析学研究室

岐阜薬科大学

当研究室は、神経細胞死のメカニズム解明をテーマとし、2004年に開設された。疾患領域は脳卒中、統合失調症等の中枢性疾患と、緑内障、糖尿病網膜症等の網膜疾患。動物モデルや臨床サンプルを用い、病態解明や治療薬の候補探索を行う。これに加えて、蜂産品やブルーベリー等の神経細胞保護作用についても検証を進める。「創薬につながる研究を」。この理念は、企業で創薬研究に努めてきた原教授の経験に基づく。その実現のため、多くの製薬会社との共同研究をはじめ、国内外の産官学と活発に連携。徹底的な実践教育もラボの理念の一つだ。「うちでは、4回生にも著者として論文を書かれます。数人で書くほうが論文の質は上がるけれど、ファーストオーサー以外は「お手伝い」感覚になって自分で考えないから」。どこでも通用する人材を育てること。そのため、時には厳しい叱責も厭わない。「駄目な人間はいません。その人にしかないものが必ずある。それを見つけて、引き出してあげたい」。学会発表に慣れるため、月報会は英語で行われる。研究室では、メンバーの熱い交流が日々繰り返されている。



原 英彰 教授



研究室の皆さん